〔その他〕研究ノート

民権家、漢学者、土居光華の思想と行動に関する一考察
――書簡と明治期出来事の分析を通して

長谷川　正徳（東京都立日本橋高等学校）

1. はじめに

この研究の課題は、いかにしてわが国で民主主義が根付いたのか近現代の思想や活動家から学び、忘れられた歴史を掘り返すことにある。具体的には明治時代の国会開設へ向けた時期の自由民権運動について検討し、筆者なりの論考を纏める決意をした。今回取り上げる土居光華という人物は、明治期に言論活動を通じ政治家として活躍した人物である。近年土居のひ孫にあたる赤塚邦代氏が土居の書簡などを三重県松阪市に寄贈したことが報じられている。その書簡の数々はもともとは赤塚氏の父親にあたる土居満寿雄氏が長く保管してきたものと一部の方には知られていた。親族が貴重な史料を長く綺麗に保管されてきた。明治時代から大正時代を生きた、啓蒙思想家土居光華の生涯について考察し、彼の考え方や思想を通し、あらためて自由民権運動の広がりを検討していきたい。

2. 自由民権運動

2. 1. 自由民権運動の特徴

民主主義的な国家を人びとが求めた自由民権運動と活動を確認したい。安西邦夫（2012）の考えを要約すれば、自由民権運動とは近代への移行期に、立憲制国家の建設、主権国家として外国と対等な関係を保つ独立国家の構築を目指した国民運動であるという。安西によると自由民権運動に関して具体的に５つの特徴 (1)が挙げられている。

憲法の制定＝自由・人権などの国民の諸権利の保障
国会の開設＝国民の政治参加の実現
地方自治の確立＝国民の政治参加の実現
地租の軽減＝国民生活の擁護
条約改正＝主権国家の確立

2. 2. 先行研究

安西によると、自由民権運動の研究では新しい歴史学が存在する。それは大日方純夫（2004）の言葉で「旧い歴史学」と「新しい歴史学」と整理できると紹介している。つまり前者は支配と抵抗、闘う民権を強調する。後者は民衆運動、言説、物語、記憶に強い関心をもつもの (2)である。

民衆史の視座から研究を進めたものもある。牧原憲夫（1997）は「なぜ近代日本の民衆は

国家にからめとられてしまったのか」(18 頁)ということに着眼した。さらに民権運動（民権運動家や民権派）と民衆運動の違いを考察した。稲田（2009）は、民権運動を立憲政体をめざし繰り広げた運動ととらえ、次の二点に着目した。まず、民権家に焦点を合わせ民権運動をみること、次に民権家とは身分や出自に関係なく日常的に活動するものをさすと考えている。民権家の活動は初期は新聞であったがやがて演説に変わっていく。新聞紙条例などの取締りが行われたが、言論が社会を変えたことを明らかにした。

長谷川権一（1972)は静岡県内での民権活動の発生や土居光華の静岡県内における啓蒙活動について検討し、演説や出版活動によって自由民権運動が広がりを見せたことを紹介している。また、上野利三（2013)は、土居が静岡県を離れ、三重県で活動していた時期について 1890 年頃の選挙区の情勢と民権運動の広がりについて研究している。

3. 土居光華と地域啓蒙

3．1. 土居光華の略歴

本稿で取り上げる土居光華はどのような人物であるのか。以下では、土居の生い立ちから略歴、次に土居の書いたものを確認し、最後に 1882 年静岡県内で創設した岳南自由党の動きから板垣退助の襲撃の時期に 3 つに分けて検討していく。

土居光華は 1847 年 6 月 24 日に淡路国三原郡に生まれる。漢学を学び、1865 年には大和五条の儒者、森田節斎の門人となる。その後、1866 年、江戸に行き、漢詩文を学ぶ。1879 年、政治結社「北辰社」を設立し、2 年後には、東海暁鐘新聞を刊行する。1882 年、静岡県で岳南自由党を創立し、翌年 1 月から 4 月まで、伊豆、静岡、浜松を遊説する。1885 年東京府兵事課長となる。1887 年 3 月、三重県の飯野・飯高・多気郡郡長に就任する。ちなみにこの地域はかつて明治 9 年に伊勢暴動の起こった地域で、地租改正に反対する一揆の中で最大の一揆が起きた地域である。土居は 1894 年 3 月、第 3 回総選挙で、三重県第 4 区から衆議院議員に当選する。また同年 9 月、第 4 回総選挙で再選する。晩年の土居は、1917（大正 7)年、本居宣長墓地周辺の整備計画を立て、三重県の松坂市山室山奥に桜を植樹する整備計画を立てる。1918 年 12 月 11 日、松坂市で生涯を閉じる。山室山に光華の墓はある[(3)]。

土居光華　略年譜

1847 年	6 月 24 日、淡路国三原郡に出生。（＊阿波藩督学岡山鴨里に漢学を学ぶ）
1865 年	大和五条の儒者森田節斎の門人となる。
1866 年	脱藩して江戸に行き、林鶴梁に漢詩文を学ぶ。
1874 年	『近世女大学』、『母の導き』、『報国新誌』を刊行。
1879 年	「北辰社」を設立。
1881 年	「東海暁鐘新聞」を刊行。
1882 年	1 月、岳南自由党を創立。
1894 年	3 月、第 3 回総選挙で三重県第 4 区、衆議院議員当選。
1918 年	12 月 11 日死去。

3．2．土居光華と自由民権運動

土居光華はどのようにして、自由民権運動につながる考えを持論として持ったのであろうか。彼は最初は江戸時代の尊王論から出発している。その後、『報國新誌』（1974 年 8 月出版）の「日本國民ノナキノロン」[4]では、日本人民は政府にただ頼るだけで自立の意志はなく、欧米列強のような志気も権利もないという内容を著している。土居の憤りが自由や民権を求める運動につながっている。土居は正義感が強い人物である。土居は四国の淡路島出身であるが、自由党の板垣退助から多くの影響を受けたことは否定できない。彼の著書である『政党論』には次のような内容が主張されている。

史料１『政党論』の概略

第一章　政党ハ何ノ時ニ起ル乎
第二章　政党ノ効用ヲ論ス
第三章　政党ノ弊害ヲ論ス
第四章　党人及ヒ社会ノ関係
第五章　政党ノ年歯

注 旧字体を現代の字に改めた。

史料２　自由党ノ尊王論

板垣先生　口述

世二尊王家　多シト雖モ　吾党　自由党ノ相キ　尊王家ヘアラチヘシ
世ニ　忠臣　少ナカヲ　スト　雖モ　吾党自由党ノ如キ　忠臣ハ　アラン　ヘシ

注 上記は『政党論』の附録にある。

政党とは、政治につき同一の意見を持つ人々の結合したものである。土居は政党の利点や弊害などについて纏めた。またこの『政党論』は後半に「自由党ノ尊王論」が記され、板垣退助の口述を大事にし、土居が民権の伸張につとめたことがうかがえる。

3．3．岳南自由党の活動と板垣遭難事件

土居は静岡に来る前、北辰社という東京の結社で活動していた。そのような折、静岡で、弁の立つ人物はいないか依頼を受け、土居は同志の荒川高俊らと静岡で啓蒙活動を行う。明治 15 年 1 月、岳南自由党を結成した。このころの同組織は県内の様々な場所で、演説活動を行った。明治 15 年、自由党の総裁、板垣退助も静岡県内を回り遊説した。3 月 14 日、静岡感応寺にて自由党の竹内綱、板垣などの話が盛況であった。官憲による言論弾圧などが話題となる。

このように民権運動を繰り広げた自由党であったが、事件が自由党を襲う。1882 年 4 月、自由党の板垣退助が岐阜県内で刺客に襲われる事件が起こる。当時、自由党の活動は政府当局にとって好ましいものではなかった。板垣を襲ったのは相原尚褧という 27 歳の小学校教員である。幸い傷は深くなく板垣退助は助かった。確認できる史料として、自由党の竹内綱から土居への書簡と岐阜県御嵩（みたけ）警察署御用掛の「探偵上申書」、医師後藤新平による「診断書」が残っている[5]。後藤は、板垣と親しい内藤魯一から連絡を受け、板垣の怪我を診た。土居宛の書簡の存在は知られていなかったが、後藤の「診断書」が裏付けるように土居が板垣の側近から連絡を受けるほど組織内で評価されていた証であるといえよう。土居に書簡を送った竹内綱は吉田茂の実の父親であり、実業家としても活躍している。

史料３　**竹内綱の書簡**

岐阜今小町玉井屋

謹呈倍出壮条
奉大賀候、陳ハ過日
来ハ千萬御配慮
相掛感佩之至
奉存候、陳ハ一昨六日
板垣氏霊変之一
条二ハ早速御報
知可申上筈之処、
書紀之者ニ為相認
差置候、夜之処取
紛失念之疎失致
仕候、則別紙二御報
道申上候間、御招致
被下度奉存候、負傷
ハ大ニ相気遣候処、
案外二浅手ニ而
次第二全快候間、
萬御安心可被下候、
日々諸方ヨリ之来
訪等ニ取紛候ニ付、
明日猶御報道
可申候、草々
頓首
四月八日　　綱
土居様

（杉本喜一氏の口語要約）

先日来大変お世話になり感謝しております。さて去る六日の板垣氏異変に付いては、すぐにでもお知らせするつもりで書紀の者に書かせ置いた処、夜の内に取り紛れて忘れるという失態をしました。改めて別便でお知らせします。板垣氏の負傷は大変心配しましたが、案外に傷は浅く順調に全快しますのでご安心ください。毎日諸方から来訪者があって混雑しておりますので、明日以降引き続きお知らせします。

松阪市教育委員会文化課郷土資料室編（2016）『土居光華関係書簡群調査報告書』松阪市教育委員会、61 頁

板垣の受けた傷は左右の胸、両手、左頬である。「診断書　高知縣士族　板垣退助　右診断及ヒ候慶頁傷部（中略）声明ヲ失フル至ラサルモノト考察ス（中略）　後藤新平」[(6)]と明治 15 年 4 月 8 日付で診断されている。板垣退助は命に別状はなく、板垣遭難事件をきっかけに国民にも自由民権運動が知られるようになった。

4. 岳南自由党の特徴と解党

板垣退助は、岐阜で刺客に襲われたが命は助かった。一方、土居光華は静岡県内で岳南自由党への加盟を新聞で広告し党員数を増やそうとしていた。板垣退助の遊説、地方組織の岳南自由党の結成と解党という、自由民権運動の高揚と退潮について検討する。1882 年、岳南自由党が静岡に結成される。原口（1984）によると静岡で結成された岳南自由党は以下の特徴があった。「この党は、静岡県改進党とはちがって、党費を徴収せず、無名の下層民でも入党を許す方針をとったので、党員数は急増している」[(7)] と指摘するように、農民、改進党に賛同しえない人々が加わってくる。この時期、論客である前島豊太郎、荒川高俊の筆禍事件があり、彼らの下獄が決定した。岳南自由党はこの前島、荒川の不在の状態であった。そのような中心的人物２人が不在のまま、土居は５月から党則の原案作成、総会議の運営に尽力する。6 月 12 日より開かれた自由党臨時会議の際、幹事となり、本部の維持法、役員改選、規則の修正に尽力した。しかし 6 月 12 日の自由党の会議終了後、幹事の大石正巳は警察署に呼びつけられた。そして岳南自由党は警察などの権力や弾圧に対抗す

る団結力の弱さにより活動が難しい状況となった。それは改正集会条例により、集会の取り締りが強化され、政治に関する集会をするには警察に届けて許可を受けなればならなくなったことが背景にある。そのため、地方支部を存続させ相互に連絡ができなくなった。次の史料が残っている。

史料４　岳南自由党諸君ニ告ク

昨日午後四時本部ヨリ自由党解党ノ旨電報ヲ以テ申シ越シタリ、

右ニ付キ直ニ岳南部モ解停候事　　一五年六月三十日

出典　『函右日報』広告、明治 15 年 6 月 30 日、

静岡県民権百年実行委員会（1984)『静岡県自由民権史料集』403 頁

以上の動きから、民権運動を展開していく上でどのような問題があったのだろう。岳南自由党の解党や政府による言論の弾圧などを踏まえ、課題とその要因を考察する。まず、自由党は全国に地方組織を作り、これを強化していく段階にあった。その最中、総理板垣退助が襲われたこと、さらに言論の統制による逆風があったことが挙げられる。また中央から地方へ組織の拡大をしていくなか、自由党は結党以来、土佐派とその他のグループという内部の不和を抱え、政府の言論取締りに対抗するだけの協力や団結力が弱かった。しかし、このような結果になったけれども土居光華や岳南自由党が困難に遭いながら、静岡県内での党員の増加や演説の盛り上がりを残したことは一定の意義がある。

5. むすび

自由民権運動の高揚の時期に静岡県で啓蒙活動を推進した土居光華の思想と行動について考察してきた。政府にとって好ましくないという状況で、岳南自由党は解党を余儀なくされた。また、総理の板垣退助も演説後に襲われる出来事にも遭う。しかしながら、集会の制限の中、土居光華が新聞の発行や演説による人々への支持拡大に尽力したことは意義深い。民権家たちは困難を経験しながら、民権運動を進め、国会の開設を実現していくのである。困難な中にあっても清廉潔白に、世の中の不満を持つ人のために尽力した言論人として土居光華は評価される人物である。

注

(1) 安西邦夫（2012）7 頁

(2) 大日方純夫（2004)12 頁

(3) 土居の略歴は、松阪市教育委員会文化課郷土資料室編(2016)および長谷川権一(1972)および日本歴史学会（1982)を参照した。

(4) 杉本喜一（2016)「論説 淡路島の残影――土居光華の思想と行動」22 頁
土居は、日本の政府が台湾を攻めるとき、国民に知らせないのは日本国民がいないのと同じであると表明している。

(5) 児玉正任（1992)は「探偵上告書」と「診断書」があることが記されている。探偵上告書に「板垣ハ其ノ場ニ倒ル行兇人尚ホ刀ヲ擬スル際内藤魯一駆ケテ行兇人ヲ引倒シ」という板垣が襲われた直後の記録がある。探偵上告書は岐阜県警察署のものである。

(6) 後藤新平の「診断書」国立公文書館所蔵。後藤は愛知医学校長兼病院長であった。

(7) 原口清（1984)「解説」793 頁

参考文献

安西邦夫（2012)『自由民権運動史への案内』吉田書店

稲田雅洋（2009)『自由民権運動の系譜――近代日本の言論の力』吉川弘文館

上野利三（2013)「第一回総選挙における土居光華と板垣退助――三重県第四区情勢、続・日本初期選挙史の研究（10)」『地域社会研究所報』第 25 号、三重中京大学

大日方純夫（2004)「『自由民権』をめぐる運動と研究――顕彰と検証の間」『自由民権』第 17 号

鹿野政直、高木俊輔編著（1972)『維新変革における在村的諸潮流』三一書房

鹿野政直（1999)『近代日本思想案内』岩波書店

栗田信太郎編著（1832)『自由 改進 漸進保守 明治演説評判記　全』變了閣蔵版

児玉正任（1992)『公文書が語る歴史秘話』毎日新聞社

静岡県民権百年実行委員会編（1984)『静岡県自由民権史料集』三一書房

杉本喜一（2016)「論説 淡路島の残影――土居光華の思想と行動」(2016)松阪市教育委員会文化課郷土資料室編

土居光華（1874)『報國新誌』

土居光華（1882)『政党論』出版社内田弥兵衛

日本歴史学会（1982)『明治維新人名辞典』日本歴史学会編、吉川弘文館

長谷川権一（1972)「民権運動と地域啓蒙――土居光華の思想と行動」『維新変革における在村的諸潮流』鹿野政直、高木俊輔編、三一書房

原口清（1984)「解説」『静岡県自由民権史料集』静岡県民権百年実行委員会編、三一書房

牧原憲夫（2019)『牧原憲夫著作集〈上巻〉明治期の民権と民衆』藤野裕子、戸塚英明編有志舎

牧原憲夫（1997)「民権と民衆――二項対立図式を超えるために」『自由民権』第 10 号

松阪市教育委員会文化課郷土資料室編（2016)『土居光華関係書簡群調査報告書』松阪市教育委員会